

Title	トマス・グッドウィンにおける聖霊論
Author(s)	高, 萬松
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No. 45
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2013
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

トマス・グッドウィンにおける聖霊論

高 萬 松

はじめに

イギリスの神学者W・H・グリフィーストマス(W. H. Griffith Thomas)は、プリンストン大学のストーン講演(Stone Lectures)(一九一三年)の主題を「聖霊論」とした。グリフィーストマスがこの講演をまとめた著者の序文で明らかにするように、その内容に当時の神学者P・T・フォーサイスの思想が反映していることは興味深い。「一七世紀の半ばに注目すると、英国国教会は彼らの信条の中に聖霊についての明確な言及があるにも関わらず強調せず」と。その時代、クエーカー教徒たちは、英国国教会の教会中心主義(Ecclesiasticism)に対する反発として聖書の權威を無視し、聖霊を各個人の魂の内にある内的光(Inner Light)と捉えた⁽¹⁾。しかし、このような時代に聖霊を主題として取り扱った神学者が二人いた。トマス・グッドウィンとジョン・オウエンである。グリフィーストマスは、二人について次のように評価している。「グッドウィンは」聖霊とキリスト者の生との関係についての理解の発展に新しい時代を開いた。この特定の主題に関する限り彼の著作は独自の位置を占めている。より広範囲な問題を扱った大著であり、よく知られている著書としてオウエンのものがあるが、これらを超える作品は未だ出てこない⁽²⁾。注目すべきことは、この

ような作品を通して、彼らは、聖霊とキリスト者の生に關して宗教改革者の原理を發展させているということである。またこれらの著者によつて後の時代にも大きな影響を与えたということであろう。

前述のグッドウインの書物は著作集第六卷のことで、その副題は『*The Work of the Holy Ghost in Our Salvation*』である。われわれも聖霊が人間の救いにどのような働きをしたかに絞つて考察したい。オウエンはオックスフォードのクライスト教会で説教していた頃、グッドウインと共にセイント・メアリ教会で一週置きに説教した。二人は協働したことがあり、そのため二人の間には共通点が多々見られる。これらのことを踏まえてトマス・グッドウインの聖霊論について考察したい。

1 救いの適用者としての聖霊

① 救いの適用者 (applier) とつとの聖霊

聖霊は誰から出るのだろうか。これは教会史において重要な問題であつた。グッドウインは神とキリストから出ると考えたと言つてよいであろう。彼の書物においては、聖霊が神とキリストから出ると述べられている箇所もあれば、神から出ると述べられている箇所もある。前者については次のように論じられている。すなわち、「実に聖霊は他の二つ〔つまり、神とキリスト〕から出る (proceeding) ように、位格においては最後「三番目」であるが、神格への参与 (participation) において彼「聖霊」は両者「神とキリスト」と同等である⁽³⁾」。教会史において教会が東方教会と西方教会に分かれたのは、聖霊が誰から出たかという「フィリオクエ」(Filioque) 子からもまた) 論争に起因する。その論点

は、聖霊が「父からだけ」出たと言えるか、それとも「父と子から」出たと言えるかという立場の違いである。⁽⁴⁾ グッドウインは前記箇所のように、聖霊が父と子から出たという立場に立っている。そして、聖霊は「父と子と同様に三位一体におけるひとりの人格」であり、人間のための働きから見て聖霊はその本質において父と子の働きと同じように大きい。⁽⁵⁾

では、グッドウインの「聖霊が人間の救いの適用者」だという主張について見てみよう。父と子と聖霊の役割は各々異なる。父である神は救われる人を選ぶ。グッドウインはカルヴァンの影響を受けているため、選びを強調する傾向が見られる。子であるキリストは贖罪の業を行う。その選びと贖罪をわれわれに適用 (application) するのが聖霊である。⁽⁶⁾ 聖霊の働きなしに、われわれは神に選ばれているということを知ることが出来ず、聖霊の働きなしにキリストの贖罪をも知ることができない。そのような意味で、聖霊の働きはグッドウインの言うように、人間の救いについての「究極的行為」 (the last act) ⁽⁷⁾ と見ても良いであろう。

上述のような聖霊の働きを人間の救いの適用とする見方は、グッドウイン以降の神学者にも見られる。例えば一九世紀のスコットランドの長老派神学者ジェームス・ブキャナンは、グッドウインとオウエンを高く評価し、「ルターが救いを獲得するためにキリストの働きを強調したように、ピューリタンたちは救いを適用する (applying salvation) 聖霊の働きを強調した」⁽⁸⁾ と見ている。前述のグリフィーストマスも同様の見方を持っている。彼は「聖霊がキリストの贖罪を魂に適用する」⁽⁹⁾ と言う。つまり、歴史の一点における神をすべての時代の神とならしめたものは何であろうかという点に注目し、イエスを啓示したのは聖霊であったとするのである。

② 賜物としての聖霊

グッドウインは「二重の賜物」(double gift)⁽¹⁰⁾と言つて、聖霊の賜物を二つに区分する。一つは聖霊が人間に与えているいろいろの賜物であり、もう一つは聖霊の人格、つまり、聖霊そのものを示す。「わたしたちに賜っている聖霊によつて、神の愛がわたしたちの心に注がれている」(ローマ五・五)。その箇所では聖霊とは、聖霊「の人格」そのものの賜物 (gift of the person of the Spirit) を意味する。それは、聖霊の多様な賜物を意味するのではなく、聖霊そのものの絶対的で、完全な賜物を意味する。最も重要なことは、聖霊が「恵みの契約」(covenant of grace) によつてわれわれに与えられるということである。⁽¹¹⁾

ウェストミンスター信仰告白は「恵みの契約」を次のように定義する。「人間は、自らの墮落により、自分自身を、その契約によつては命を受けられなくしてしまつたため、主は、一般に恵みの契約と呼ばれる、第二の契約を結ぶことをよしとされた。この契約において主は、罪人に、イエス・キリストによる命と救いを無償で提供し、彼らからは、救われるために、イエス・キリストに対する信仰をお求めになり、そして、永遠の命に定められている者たちすべてに、彼らが信じたいと願い、また信じることができるようにするため、彼の聖霊を与えることを約束しておられる」⁽¹²⁾(第七章人間と神の契約について、三)。ここではウェストミンスター信仰告白の前記箇所を注解しているオーストラリアの神学者(新約学)のトム・ウィルキンソン (Tom Wilkinson) の言うように、「古い契約と新しい契約が……一つの契約として真に描くことができる」。また、神がこの大いなる契約の仲介者であるイエス・キリストを提供し、われわれが信じていることができるようにして下さる聖霊の神秘的な働きが示されている。

恵みの契約における聖霊の中心となる働きは、神がわれわれの善のために、神の持つすべてを自由にわれわれに譲渡

するということにある。神と民とのその契約によつて「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」(ヘブル八・一〇)という人格的關係が成立する。キリストがこの世に来た時、彼の人格を与えたように、またキリストが死んだことも、人格 (Persons) のためであった。キリストは羊のために命を捨てたのであるが、それは神の人格であり、究極的にイエス・キリストの人格であった。それゆえ、「第三番目の人格において聖霊の賜物はわれわれに住む (dwell) 彼「キリスト」の人格の賜物⁽¹⁴⁾」であつたのである。

③ 聖霊の内住 (indwelling)

聖霊がわれわれの内に住むということについて、二つが考えられる。一つはわれわれを清める聖霊の働きであり、もう一つはわれわれを慰める聖霊の働きである。

第一に清める聖霊の働きは、「聖性」(holiness)と関わっている。キリストは「それ「聖霊」がきたら、罪と義とさばぎとについて、世の人の目を開くであろう」(ヨハネ一六・八)と語つた。グッドウィンは「さばぎ」を、真の聖性についてのさばぎ、きよめ (sanctification) についてのさばぎ、そしてわれわれの心と生活の改革 (reformation) についてのさばぎと解釈する。⁽¹⁵⁾ そのような解釈は、「さばぎの霊」が神の民の持つている罪の汚れを清める (イザヤ四・四) という思想に立っている。グッドウィンにとつて「聖性」は「御霊のきよめ」(Iペテロ一・二、IIテサロニケ二・一三)と等しいもので、聖霊はわれわれにおける聖性の卓越した効力であつたと考えられる。⁽¹⁶⁾

第二に聖霊は慰めるもの (comforter) である。ヨハネ一四・一六はKJVで〈And I will pray the Father, and he shall give you another Comforter, that he may abide with you for ever.〉となつており、直訳すれば「わたしは父に願ひしよう。父は別の慰めるものを遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください」。ここでの「慰めるもの」

は注目に値する。信者の持つ信仰の喜びは、聖霊からの慰めによる。聖霊は、信者の心に喜びと、そして言いようのない喜びを満たすためにこの世に遣わされたのである。⁽¹⁷⁾グッドウィンによれば、再生の未経験者はそのような特権を持つことができない。なぜなら、彼らは再生の効果と心の変化を知らず、慰めるものの存在をも知ることができないからである。敢えて順序を言うならば、「聖霊は慰めるものとなる前に再生を与えるものでなければならぬ」⁽¹⁸⁾。聖霊がわれわれの内に宿るということは、恵みによる聖霊の人格がわれわれに与えられたということであり、結果的に聖霊は救いの保証者となるのである。

以上のような二つの分け方、つまり、一方では清める聖霊、他方では慰める聖霊というグッドウィンの見方がオウエンに継承されていることについて考察しよう。オウエンはそれらを能動的受容と受動的受容とに分けているが、グッドウィンのものと非常に似ている。オウエンは言う。「器が水を受けるようにわれわれがきよめの霊 (Spirit of sanctification) を受けるのは受動的受容 (Passive reception) である。彼はエゼキエルの見た谷の枯れた骨に吹いた風のように来る。彼は枯れた心に臨み、全能の力の行為によって彼らに命を生き返らせる」⁽¹⁹⁾。続けてオウエンは慰めの霊を次のように言う。「しかし慰めの霊 (Spirit of consolation) は別の方法で来る。この意味で主は『世はそれを受けることができない』(ヨハネ一四・一七)と言った。『この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである』。それが約束された慰めの霊、あるいは、慰めのための霊である。……慰めの霊は信者だけが受け入れる。信者たちは彼を知るゆえに彼を受け入れられるのである」⁽²⁰⁾。ここで明らかになるように、トマス・グッドウィンとオウエンが論じる「信者における聖霊の内住」は類似性を持つといえよう。

2 再生 (regeneration) と聖霊

① 再生の源 (the author of regeneration) とこの聖霊

聖書は「再生」について次のように語っている。「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである。この聖霊は、わたしたちの救主イエス・キリストをとおして、わたしたちの上に豊かに注がれた」(テトス三・五―六)。グッドウィンはこの箇所「救主なる神の博愛」(同、四節)、「聖霊により新たにされた」、「わたしたちの救主イエス・キリストをとおして」という言葉に注目し、父と子と聖霊が共に人間の再生のために働いたと見、それが「再生についての憐れみの偉大さ」⁽²¹⁾だとする。言い換えれば三つの人格が再生の働きの共同の源 (the authors of this work) であった(一ペテロ一章三節)。しかし、グッドウィンはそこにとどまらず、「聖霊により新たにされた」(the renewing of the Holy Spirit) という言葉から再生のための聖霊の卓越さとその活動の重要性を見、聖霊を再生の源 (author)⁽²²⁾ と見なしているのである。

聖霊が再生の源だという観点は、オウエンの書物にも見られることである。オウエンは *The Holy Spirit His Gift and Power* で、聖霊の特別な働きとして「再生」をあげている。人間を救う三位の働きは各々区別されており、救う根拠は神の憐れみと愛にある。そのような憐れみと愛が主イエス・キリストに適用され、われわれのための仲保者となる。オウエンは、「父の愛と子の仲保をつなぐ有効的な要因が聖霊である。聖霊の働きによってわれわれの本性が有効的に回復される」、したがって「聖霊はわれわれの再生させるお方であり、再生の源である」⁽²³⁾、と言う。この点で、グッドウィ

ンとオウエンは親近性を持っている。

②「新しい原理」(new principle)の注入としての再生

アメリカ在住のオランダ改革派神学者で近年ピューリタン関連の神学書を多く出しているジョエル・R・ビーキ (Joel Beeke) は *The Quest of Full Assurance* (1999) という書物において、グッドウィンとオランダの神学者の思想を比較している。ビーキによれば、ピューリタンは信仰の行為 (the act (actus) of faith) を強調し、オランダ神学者たちは信仰の原理、あるいは、信仰の傾向 (the principle of habit (habitus) of faith) を強調した。グッドウィンにおいては信仰の行為と信仰の原理の両方をバランスよく強調されている⁽²⁴⁾。

再生を経験した人間は「新しい原理」(new principle)⁽²⁵⁾に生きる。魂の中に新しい原理が注入されると、その人の精神に「新しい超自然的光」(a new supernatural light)⁽²⁶⁾が照らされ、キリストにおける霊的な善と恵みを見極める力が生じる。それだけではない。どんな肉の人間の心にも決して入ることのできない、「神の御顔と現臨という聖性の善と美を見ること⁽²⁷⁾ができる」。また、新しい原理は、霊的に生まれた人間に「新しい習慣、あるいは、物事を賢く判断する力⁽²⁸⁾」をも与える。

オウエンは言う。「再生に要求されることがあるとすれば、それは霊的な命と光と義を持つために、魂と魂の機能の中に新しく、实际的で、霊的な原理が注入 (infusion of a new, real, spiritual principle) されるという⁽²⁹⁾ことである」。と。そうすることによって、新しい原理と正反対の原理、つまり、神に逆らつて罪を犯し、神に敵意を抱かせる生まれつきの習慣的原理 (habitual principle) が追い出される。

数多くの魂が聖霊による再生を経験する。過去も現在も、また、未来においても。「いと高き者の力」(ルカ一・三五)

がキリストを生まれさせたように、神の力が数千億の人々を回心させる。「道徳的説得」(moral persuasions)⁽³⁰⁾によって人間は回心しない。道徳的説得とは、例えば言葉によって人々を教化させる(enlightening)ということの意味である。オウエンが言うように「道徳的説得はそれが進歩され発展されたものであっても、人間の魂に新しい真の超自然的力(real supernatural strength)を提供できない」⁽³¹⁾。道徳的説得は、理性的根拠と動機と論証を通してその効力を発揮するため、われわれの持っている力を刺激することに過ぎない。「われわれは回心においても聖霊の全体的働きが道徳的説得にないということを言わねばならない。効果的に回心し真に再生を経験したすべての人々の魂の中に恵み深い霊的原理を注入する聖霊の実際的で物理的な働き(real physical work)があるということである」⁽³²⁾。

聖霊が原理としてわれわれの魂の内に内住するという考えはジョンサン・エドワーズにおいても見られる。エドワーズは言う。「彼「聖霊」は、ご自身と聖徒たちの心を連合させ、聖徒を彼の神殿とし、生活と行動についての新しく超自然的な原理として聖徒を動かし影響を与える。聖霊は敬虔な人々の魂において活動し、そこで彼自身の固有な本性において自身を伝達する。聖性は聖霊の固有な本性である」⁽³³⁾。エドワーズにとって魂の内にある恵みの原理は、「魂の内に住んで、重大な原理として働く聖霊そのものである」⁽³⁴⁾。

以上で見たように、オウエンにとって新しい原理は「聖霊の実際的で物理的な働き」によって確立されるが、グッドウインにとってそれは「神の力の尊い偉大さ」によって確立される。

③ 「神の力の尊い偉大さ」(the exceeding greatness of God's power)

グッドウインが聖霊を力の概念として捉える時、キー・ワードとして「神の力の尊い偉大さ」(the exceeding greatness of God's power)⁽³⁵⁾という表現を用いている。つまり、聖霊は「偉大な力だけでなく、力の偉大さであり、か

つ、尊い偉大さである⁽³⁶⁾。グッドウィンの言う「神の力の尊い偉大さ」は、オウエンにおいても、同意語で用いられて、力と恩寵による聖霊の働きとして強調されている⁽³⁷⁾。それは両者が聖書を重んじ、同じ箇所、すなわち、エペソ第一章一九節を思索した帰結であろう。〈And what is the exceeding greatness of his power to us-ward who believe, according to the working of his mighty power.〉⁽³⁸⁾

グッドウィンの言う「神の力の尊い偉大さ」が最も現れるのは神の創造においてである。特にそれは第二の創造(second creation)⁽³⁹⁾ においてである。グッドウィンにとって創造は「第一の創造」(first creation)と「第二の創造」(second creation)とに分かれている。前者は無から有への創造、つまり、原初的創造を意味し、後者は聖霊によって新しい被造物に生まれ変わる新しい創造を意味する。新しい契約による新しい被造物となるということである。

新しい原理に抵抗する古い原理がある。例えば自己愛がそれである。グッドウィンによれば古い原理を壊すためには新しい創造しかない。つまり、第二の創造である。この意味において、彼が、第二の創造は第一の創造より偉大である⁽⁴⁰⁾、と見ているのは妥当性がある。というのは、第二の創造では人間における古い対抗原理を壊さなければならなかったからである。新しい原理に抵抗する古い原理を壊すことのできるところに「神の力の尊い偉大さ」がある⁽⁴¹⁾。それゆえ、「神の力の尊い偉大さ」とは、神の創造の力であり、キリストの復活の力であり、再生の結果として新しい創造の力であったのである。

④ 傾向 (disposition) への聖霊

魂の機能の他に、その背後で彼らを統制する何かがあつて、それが「傾向」(disposition)⁽⁴²⁾ と呼ばれている。

オウエンにとって前述の超自然的原理は全人に注入される。すなわち、「再生は、新しく、霊的で、超自然的で、生

命力のある原理、あるいは、恵みの傾向 (habit of grace) が聖霊の能力によって魂と精神と意志と感情の中に注入される。それによって、信仰と従順という霊的で超自然的かつ生命力のある行為ができる傾向 (disposing) と能力が与えられるのである⁽⁴³⁾、とオウエンは言う。聖霊が全人に対して新しい傾向を与えるということである。

グッドウィンは聖書から三つの傾向を見出す。第一は新しい傾向 (new disposition) として、人間の心の気質 (temper) と⁽⁴⁴⁾言いつつ⁽⁴⁴⁾。第二は恵み深い傾向 (gracious disposition) として、一コリントの二二章と二三章で見られる聖霊の賜物とは区別される傾向⁽⁴⁵⁾である。第三は天的傾向 (heavenly disposition) と、すなわち、魂を上に向け、天的事柄に適応させる傾向である。

もっとも重要なことは、天的傾向が注入される座 (seat) であり、その座はどこかということである。KJVのエペソ四章二三節は〈in the spirit of your mind〉となっている。日本語の訳では、「心の底から新たにされて」(新共同訳)、「心の深みまで新たにされて」(口語訳)である。グッドウィンはその〈spirit〉に「天的光と傾向という霊的原理」(spiritual principle of heavenly light and disposition)⁽⁴⁶⁾が注入されると理解している。〈spirit〉こそが恵みの座であり、〈spirit〉は〈mind〉のもっとも高い領域として、その頂点であったのである。

⑤ 再生の結果

グッドウィンは再生を状態の変化と見ている。すなわち、自然の状態 (state of nature) から恵みの状態 (state of grace) への変化である。「自然の状態」とは生まれながらの人の状態であり、「恵みの状態」とは「再生」を経験した人の状態である。前者を「肉の状態」、後者を「霊の状態」と呼んでもいいであろう。キリスト教では「再生」を通らなければ自然の状態から恵みの状態へ転換することは不可能であろう。「自然の状態」は、神の怒りを受ける呪いの状

態であり、本性の腐敗によって罪の罪責に置かれている。それだけではなく、その状態は死に値する。というのは、人間の思いが「幼いときから悪である」⁽⁴⁷⁾からである。

一言で言えば、再生の結果、人は「霊的な人」に変わるのである。「霊の人は、すべてのものを判断するが、自身はだれからも判断されることはない」(1コリント二・一五)ように、生まれ変わった人の魂は「霊的化された (spiritualised)」(ὁ πνευματικός)、すなわち、「霊の人 (a spiritual man)」であり、それによって「霊的なもの (spiritual things)」(τὰ πνευματικά)⁽⁴⁸⁾を「霊的に (spiritually)」(πνευματικῶς)⁽⁴⁹⁾受け入れる。したがって、再生の結果、肉の人が霊の人となつて、霊的な祝福を受けることと等しい。

3 聖化

① 聖化とは

カルヴァン神学者 I・J・ヘッセリンク (I. John Hesslink) は *Calvin on the Holy Spirit and the Christian Life* (2005) という題の論文で、キリスト者の生活における聖霊の働きを扱っている。そこで「カルヴァンが信仰生活のために用いた主な言葉は聖化ではなく再生」⁽⁵⁰⁾であると述べる。カルヴァンにとつて聖霊の働きは聖化より再生に重点があったといえる。このような傾向はグッドウインの思想においても見られる。グッドウインの著作において聖化という言葉の頻度は再生より少ない。そこで、ここでは論理的にアプローチするより、むしろグッドウインの前後の時代における聖化という言葉の用法に注目したい。これによって、われわれはピューリタンにとつて聖化という言葉は人間におけるキリス

トのかたちの回復と理解できるのである。

カルヴァンは義認と聖化を「二重の恵み」⁽⁵¹⁾と呼び、「われわれはキリストの御霊によって聖化され、罪なき純潔の生に向かつてはげむ」と言う。そして「義」と「聖」の分割はできず、「神が恵みのうちに受け入れたもうたものはみな、子とする御霊を同時に与えられ、その力によって、神の形に似るように変革される」⁽⁵²⁾。ピューリタンに大きな影響を与えたエイムズ (Wiliam Ames) は次のような言う。「聖化は、罪の不潔から神のかたちの聖潔 (Purity) に移り行く実際的な変化である。『すなわち、あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたとして作られた新しき人を着るべきである』(エペソ四・二二―二四)。義認において信者は罪の罪責から解放され命が彼らに与えられるように(その地位は子たる身分によって定める)、聖化では同じ信者が罪の汚れと汚染から解放され神のかたちの聖潔が回復される」⁽⁵³⁾。また、エイムズは聖化の出発点を罪の不潔 (filthiness)、腐敗、汚染と見、聖化の目的を「神のかたち(エペソ四・二四)においても一度生成され創造されたと言っている知識、義と聖性)の聖潔、あるいは、神の律法への一致、ヤコブ一・二五・新しい命、ローマ六・四・新しい被造物、IIコリント五・一七とガラテヤ六・一五・神の性質、IIペテロー・四である」⁽⁵⁴⁾と云う。エイムズにおいても聖化と神のかたちの回復との関連が見られる。

では、ここでウエストミンスター信仰告白を見よう。『聖化』(sanctification)とは何ですか、というウエストミンスター小教理問答の問「三五」の答えは次のとおりである。「聖化とは、それによってわたしたちが、神のかたちにしたがって全人を新たにされ、ますます罪に対して死に、義に対して生きることができるようになる、そのような、神の無償の恵みによる御業である」⁽⁵⁵⁾。この定義は、ピーキの言うように、ピューリタンたちが「キリストのかたち」(Christ's image)⁽⁵⁶⁾に一致する過程としての聖化を意図していたことを示唆する。続いて、問「三六」は「聖化から生じる益とは、何ですか」を問う。その答えは「この世において義認、子とすること、聖化、に伴い、あるいはそれらか

ら生じる、益とは、神の愛への確信、良心の平和、聖霊による喜び、恵みの増加、終わりに至るまでの恵みにおける堅忍」である。これらを見る限り、ピューリタンたちは前述のような基礎的「傾向」(disposition)として聖化の概念を理解したと受け止められる⁽⁵⁷⁾。

以上のように聖化とは神のかたちの回復という見方が強い。ピューリタン神学者において、聖化を神のかたちの回復と見ている最も優れた表現はオウエンの次のような言葉ではないかと思われる。オウエンは言う。「聖化は信者たちの魂に対する神の直接的働きであり、それは彼らの本性を罪の汚染と汚れから清め、その中にある神のかたちを新たにすることで、恵みの霊的で習慣的な原理に従って神に従順することができるようになる。……簡単に言って、聖化はイエス・キリストを通して聖霊によってわれわれの本性を神のかたちに全般的に革新するということである」⁽⁵⁸⁾。

②キリストのかたちの回復

「かたち」という概念は、まず旧約の創世記から用いられている。すなわち、アダムの子セツが生まれた時、「アダムは、自分にかたどり、自分のかたちのような男の子を生み、その名をセツと名づけた」(Adam begat a son in his own likeness, after his image.) (創世記五・三)。第二のアダムであるキリストは天に属して、「わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとる」(一コリント一五・四九)。それは今、鏡で見るようなかたちであるが(一ヨハネ三・一、二)、われわれはキリストとの結合によって教会の肢体として、キリストのかたちと似姿において交わる。

では、聖化はどのように実現されるのであろうか。人間は、神の持っている本質的聖性(essential holiness)を預かることはできないが、次のような言葉によれば、神の聖性を預かる可能性は残されている。「霊の父はわたしたちの益

となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです」(新共同訳) (But he for our profit, that we might be partakers of his holiness.) (ヘブル二・一〇)⁽⁵⁹⁾。それはどのように実現されるのか。人間の墮落によって神のかたちは失われたが、グッドウィンによれば神は中間的道具を通して再び人間の心にそのかたちを回復させる。中間的道具は二つがある⁽⁶⁰⁾。一つは神の言葉、あるいは、福音化された律法であり、もう一つはイエス・キリストである。前者は神の聖性についての教理を伝える神の言葉であり、後者は神の聖性についての生ける超越的かたちを持つキリストである。両者はイエス・キリストに要約できる。信仰者の聖化は神の言葉を通して、Ⅱコリント三章一八節のように、心を「キリストのかたち」(the image of Christ)⁽⁶²⁾に変えるということであった。

盧は、聖化を「根本的聖化」と「発展的聖化」とに分けている⁽⁶³⁾。根本的聖化とは、われわれが信じて悔い改める時、聖霊の賜物を受けきよめられるということである。すなわち、「あなたがたは、主イエス・キリストの名によって、洗われ、きよめられ、義とされた」(Ⅰコリント六・一一)という箇所を根拠としている。これに反して発展的聖化とは、聖霊によって生まれ変わった魂が聖霊において成長していくということである。これは、「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」(Ⅱコリント三・一八)という箇所が根拠としてあげられる。大きな違いは、根本的聖化が聖徒の回心の時に得られる最初の聖性だということであろう。このような区分を基にすれば、グッドウィンの言う「聖化」は発展的聖化に近い。というのは、彼が聖化を漸進的に成長することとして理解しているからである。「人間が成長していくことと同様、聖性はますます増加され、聖霊に満たされる(ルカ一・四一)⁽⁶⁴⁾」。

結び

聖霊は再生の源である。そして救いにおける聖霊の働きは、信者の心の頂点にある〈spirit〉という座に新しい原理と傾向を与える。このようなモチーフはグッドウィンとオウエンに共通的に見られる傾向であった。ただ、その書物の構成を見ると、グッドウィンよりオウエンの方がより組織的に構築されていると思われる。

グッドウィンの聖霊論の強みは聖霊を力として理解し、それを応用していることであるが、弱点は「教会」における聖霊の働きについての言及が少ないことであろう。無論、アングリカンとの闘いや、カトリックとの見解の相違もあげられてはいる。しかし聖霊論に比較的弱いフォーサイスさえも、聖霊について論じる時、次のように教会を中心として扱っている。すなわち、「教会はキリストが啓示した福音とその主体となる福音とを分けられない。ただ教会が福音を純粹で完全な形で宣言し、その福音を固守する限り教会の権威は有効である」。⁽⁶⁵⁾「われわれは聖霊が地上に遣わされたキリストの代理者、すなわち、彼が成し遂げた贖罪を実行する唯一の実行者であると信じる」。⁽⁶⁶⁾キリストが各々の魂と教会にリアリティとして提示されることは、ただ聖霊による他ならないのである。

注

- (1) W. H. Griffith-Thomas, *The Holy Spirit of God*, WM. Eerdmans, 1955 3rd, 106. 興味深いことに、この書物の冒頭には、次のように人々に多くの福音を負わせるの特記がある。 W. T. Davison, James Denney, P. T. Forsyth, W. Robertson Nicoll, H. B. Swete, B. B. Warfield, James Orr.
- (2) *Ibid.*
- (3) Thomas Goodwin, *The Works of Thomas Goodwin*, Reformation Heritage Books, 2006, vol. 6, 3. (以下、「TG」と略記)。〈The Holy Ghost is indeed the last in order of the persons, as proceeding from the order two, yet in the participation of the Godhead he is equal with them both.〉「出⁸」を意味する〈proceed〉は、グッチウインの著作集第六巻におおむね五六回用いられている。 Cf. Paul Ling-Ji Chang, 'Thomas Goodwin (1600-1680) on the Christian Life.' Ph.D. Dissertation: Westminster Theological Seminary, 2001, 121-2.
- (4) A・E・マクグラス『キリスト教神学入門』神代真砂美訳、教文館、二〇〇二年、四六五頁。
- (5) TG, 6:3, 53.
- (6) TG, 6:47. 〈application〉という言葉は二八回用いられている。
- (7) TG, 6:46.
- (8) James Buchanan, *The Doctrine of Justification*, The Banner of Truth Trust, 1867 1st 1961, 377.
- (9) Griffith Thomas, *op. cit.*, 207.
- (10) TG, 6:59.
- (11) TG, 6:59.
- (12) トム・ウイルクソン『現代に生きる信徒のためのウェストミンスター信仰告白〈註解〉上』松谷好明訳、一麦出版社、

二〇〇三年、一六四頁。

- (13) 『改訂版・ウェストミンスター信仰規準』松谷好明訳、一麦出版社、二〇〇四年、三八頁。
- (14) TG, 6:59.
- (15) TG, 6:28.
- (16) TG, 6:28.
- (17) TG, 6:63.
- (18) TG, 6:63.
- (19) JO, 2:231.
- (20) JO, 2:231.
- (21) TG, 6:74.
- (22) TG, 6:47. KJVではキリストが〈the author of eternal salvation〉(〈ブル五・九〉)と言表されている。口語訳、新共同訳共に、「永遠の救いの源」という表現を用いている。
- (23) John Owen, *The Works of John Owen, The Banner of Truth Trust*, 2000, vol. 3, 209 (以下、「JO」と略記)。
- (24) Joel R. Beeke, *Living for God's Glory: An Introduction to Calvinism*, Reformed Trust, 2008, 279.
- (25) TG, 6:189, 433, 440.
- (26) TG, 6:433.
- (27) TG, 6:433-4.
- (28) TG, 6:434.
- (29) JO, 3:218-9.
- (30) TG, 6:426. この言葉はグッドウィンの著作集第六巻で四回用いられている。
- (31) JO, 3:309.
- (32) JO, 3:307.
- (33) Jonathan Edwards, *The Works of Jonathan Edwards*, Yale University Press, 1999, vol. 17, 411 (以下、「JE」と略記)。

- (34) JE, 21:196.
- (35) TG, 6:425.
- (36) TG, 6:427.
- (37) JO, 3:329.
- (38) TG, 6:426. 「また、神の力強い活動によって働く力が、わたしたち信じる者にとっていかに絶大なものであるかを、あなたが知るに至るように」と祈っている」(口語訳)。
- (39) TG, 6:428.
- (40) TG, 6:432.
- (41) TG, 6:440.
- (42) Martyn Lloyd-Jones, *God the Holy Spirit*, Crossway Books, 1997, Ch.8.
- (43) JO, 3:329.
- (44) 「それでも『神は、わたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに愛しておられる』と」(ヤコブ四・五)、と記されているヤコブの言葉は、イエスとヤコブとの対話の場面を連想させる。日本語聖書では味わうことができないが、KJVで「You know not what spirit you are of」と述べられている、心の内にある傾向を示す。「淫行の霊」(ホセア四・一二)のように熱烈なものもあるが、以下のように良い意味もある。聖書にはそれが「柔和な心」(ガラテヤ六・一)、「愛と慎みとの霊」(「IIテモテ一・七」)、「知恵と悟りの霊」(イザヤ一一・三)、「恵みと祈の霊」(ゼカリヤ二・一〇)と現れている。
- (45) 「それでも、『神は、わたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに愛しておられる』と」(ヤコブ四・五)。
- (46) TG, 6:164.
- (47) 「For the imagination of man's heart is evil from his youth.」(創世記八・二一)。グッドウィンは創世記六章と記しているが、それは八章の間違ひである。TG, 6:77.
- (48) 参照箇所が五・一四となっているが、それは不明な箇所である。しかしエペソ(六・一二)の原文には同様のギリシヤ語が用いられている。
- (49) TG, 6:162.

(50) I. John Hesselink, "Calvin on the Holy Spirit and the Christian Life," 古屋安雄他編『歴史と神学 上巻』聖学院大学出版会 二〇〇五年、一七頁。

(51) 『キリスト教綱要』 III, 11.1.

(52) 『キリスト教綱要』 III, 11.6.

(53) William Ames, *The Marrow of Theology*, ed. John D. Eusden, Pilgrim Press, 1967, 168.

(54) *Ibid.*, 169.

(55) 注13にあげた『ウエストミンスター信仰規準』、三〇八頁。以下、同書より引用する。

(56) Beuke, op. cit., 190.

(57) *Ibid.*, 191.

(58) JO, 3:386.

(59) 「たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされる」(口語訳)。

(60) TG, 6:390.

(61) 「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」。

(62) TG, 6:390. あるごは、¹「仲介の道具」(mediate instruments) である。

(63) 노병기 『기독교신학』 영영, 2008년, 179 (盧炳ギョングキ 『聖なる救い』 イェヨン、二〇〇八年、一七九頁(韓国語))。

(64) TG, 6:29.

(65) P. T. Forsyth, *The Principle of Authority*, Independent Press, 1912, 329.

(66) *Ibid.*, 328.